

ダーウィン進化論の観点から見た プレスナー哲学的人間学の根本問題

濱田 洋輔

現代ドイツ哲学を代表する一人であるエルンスト・トゥーゲントハットは、最後に公にされた著作の中で、「哲学的人間学」を第一哲学とすることを提唱している。つまり、哲学的人間学における根本的な問い——「人間とは何か」、より詳しくは、「人間と他の動物を分ける決定的な特徴・差異とは何か」という問い——こそ、哲学を営むにあたって第一に答えられるべき問いだということである (cf. Tugendhat 2010, p. 17, pp. 34-56)¹。

哲学的人間学を第一哲学と為すべきか否かは意見の分かれる所であろうが、「人間とは何か」という問いが哲学にとって一つの重要な問いであること、少なくとも、無意味な問いでないことは、多くの人が認める所と思われる。そもそも哲学の扱う殆どの問題が人間に関わっているのであり、しかも、哲学の歴史を紐解けば、プラトンからハイデガーに至るまで——明示的にであれ暗示的にであれ——極めて頻繁に、しかも様々な流儀で、人間は他の動物（生物）と一線を画す唯一無二の（もしくは特権的な）存在として想定されているのである。であれば、「人間と他の動物を分かち決定的差異とは何か」という問いが、哲学にとって無意味な問いであるとは言い難いであろう。

こうした前提が認められるならば、「人間と（いう生物の特徴と）は何か」という問いの重要性を唱え、その問いに正面から取り組んだという点において、——シェラー、ゲーレン、プレスナーに代表される——哲学的人間学派の試みは評価されてしかるべきであろう。しかし、そうした試み（問題設定）自体が如何に重要であったにしろ、試みの成否（問題解決の成功・不成功）はまた別の問題である。

本論文はこの別問題、つまり、哲学的人間学派の試みの成否に関わるもので

あるが、シェーラー、ゲーレン、プレスナーという哲学的人間学の立役者三人の哲学を纏めて論じようという訳ではない。彼らが主要な問いを共有するとはいえ、また、彼らの人間理解に幾つかの重要な共通点が見られるとはいえ、彼らはそれぞれ独自の哲学を形成しているのである。そこで注意しておくべきは、本稿が論じるのは哲学的人間学全般ではなく、ヘルムート・プレスナーの哲学的人間学のみであるということである。

と、本稿の射程を確認したところでトゥーゲントハットに話を戻せば、彼は哲学的人間学派の根本的な問題設定を高く評価するとはいえ、その答え方に満足してはいなかった。彼はプレスナーを哲学的人間学の代表者として引き合いに出してこう論じている。プレスナーは正しくも、人間（の意識）とは——自己自身及び世界との動的な関わりの中において——事物の表層的な現われを（深みの方へと）乗り越えて行く存在であるという考えを示唆した。しかしその示唆を深化させようとはせず、それがプレスナー人間学の決定的な欠点となっている (cf. Tugendhat 2010, pp. 20-22).

本稿はトゥーゲントハットに似て、(プレスナーを含めた) 哲学的人間学が提起する主要な問いの重要性を認める一方で、その問いに対するプレスナーの答え方には不満の念を表するものである。但し本稿は、トゥーゲントハットとは全く別の点、つまり、プレスナーの哲学的人間学がダーウィン進化論と根本的な部分で相容れない点に、その人間学の決定的な問題点を見出すものである²。本稿の主要目的は従って、プレスナーの哲学的人間学における根幹的な思想を、ダーウィン進化論の観点から批判的に検討することにある。

確かに、反ダーウィン主義的生物観に基づいたプレスナーの人間学を、今日自然科学の世界に地歩を固めたダーウィン進化論の見地から批判的に検討することにどれほどの意義があるのかという疑念が表されても不思議ではない。しかし、そうした疑念に対しては以下の三点を指摘できる。一つには、プレスナーの哲学(的人間学)には今日なお一定の重要性が認められているということ³。二つには、プレスナーによるダーウィン進化論批判(の要点)が彼の哲学的人間学の根幹に直接関わっているにも関わらず、その批判がこれまで殆ど研究さ

れていないということ。三つには、国際的に主導的な立場にある幾人かのプレスナー研究者が、——プレスナーによるダーウィン批判を真剣に考慮することなしに——プレスナー哲学はダーウィン進化論を重要な形で取り入れることが出来ると主張しているということである。

つまり、プレスナーの哲学的人間学をダーウィン進化論の観点から検討することは、今日なお一定の重要性を認められている哲学の根幹を、これまで軽視されていた切り口から明らかにすることを意味している。加えてそれは、プレスナー人間学とダーウィン進化論の関係について、幾人かの主要なプレスナー研究者の誤解を指摘することを意味している。それはまた更に、進化論の観点からプレスナー人間学に存する根本的な問題を明らかにすることで、——プレスナー研究の枠を超えて——人間—動物理解全般に関して一つの重要な注意を喚起することも意味している。

本稿の主要課題が内含するこうした幾つかの意味の内実を明らかにすべく、以下ではまずプレスナーの動物—人間理解の骨子が説明される。それに続いて彼のダーウィン進化論理解・批判が詳述され、その後、彼の哲学的人間学（彼の動物—人間理解）の根本問題がダーウィン進化論の観点から示されることとなる。

1. プレスナーの動物理解と人間理解

プレスナーは、生物とは自ら有する境界を通じて外界と関わる（外界からの刺激に反作用する）存在のことであると定義し（cf. GS IV, p. 139, p. 151）、生物の外界とのそうした関わりにおいて基礎となる構造を「位置形式（位置性）」（Positionalität）と呼んだ。プレスナーにあってはつまり、この位置形式こそが生物の（暮らし・行動の）根幹構造とされるのであるが（cf. GS IV, pp. 273-275）、彼は全生物世界において三つの位置形式のみを認めている。つまり、植物の有する「開放的」（offen）なそれ、動物の有する「閉鎖的」（geschlossen）なそれ、人間の有する「脱中心的」（exzentrisch）なそれの三形式である（cf. GS IV）。

生物界における人間の唯一性・特異性を中心問題とするプレスナーの哲学にとって最も重要なのはもちろん、人間の持つ脱中心的な位置形式であるが、その形式の理解に欠かせないのは、人間とより近縁な生物との比較、つまり、(人間と植物ではなく)人間と動物の比較である。そこでここではプレスナーによる植物の説明は割愛して、彼の動物—人間理解だけを確認しておきたい。

動物の方から話を始めれば、動物の位置形式は「閉鎖的」であるとされるが、これは端的に言って、動物が——環境世界の中の一部として存在する植物とは異なって——環境世界の中で独立した個体を形成するということを意味している (cf. GS IV, p. 291)。人間の位置形式との比較において重要なのは、この動物の位置形式の閉鎖性=独立性が同時に「中心性」(Zentralität)を含意しているということである (cf. GS IV, pp. 303-311)。また更に、この中心性という概念が「自己」・「主体」の存在を含意しているということである。プレスナーによれば、動物は体 (Leibkörper)⁴の中に、主体 (Subjekt)・自己 (Selbst) などと呼ばれる空間的に定位不可能な中心を持っており、この中心からして体を支配し動かすことが出来るとされるが、これは同時に、動物自らの体も、またその体を取り囲む外界も、全てこの「自己」という中心点へと否応なしに関係付けられているということを意味している (cf. GS IV, pp. 304-305; GS VII, pp. 240-241)。動物の体は空間の中をこちらからあちらへと動いて行くが、「自己」という中心点を離れることは決してなく、どのような状況にあっても常に、その体及びそれを取り巻く外界の一切はその中心点へと収斂しているというのである。

プレスナーによれば、こうした「相対化出来ない今—ここ」⁵(GS IV, p. 305)としての「自己」を基盤とすることで、動物は植物にはない幾つかの重要な能力を獲得している。動物は「自己」の御蔭で——植物とは異なり——体を支配し自由に動き回ることが出来るし、外的なるもの(自己に属さぬもの)／内的なるもの(自己に属すもの)を区別し経験することも出来るというのである。しかし、動物(の自己)には決定的な限界があるとプレスナーは言う。彼によれば、動物は絶対的な中心としての自己を有し、そこから発して生きているにも関わらず、その自己自身を経験し認識することはない。「動物は」——とプ

レスナーは書いている——「自らの中心から出て、〔また〕自らの中心へと入るといった形で生きている。しかし、それは中心としては生きていない。それは自己自身を経験することがない」(GS IV, p. 360)。

プレスナーが、動物と人間の間が決定的な断絶を見出すのはこの点である。人間も動物と同じように「今—ここ」を持つが、動物が「今—ここ」の中に埋没した自己 (Selbst) として存在する一方、人間は「今—ここ」に対して再帰的・反省的な眼差しを向けることの出来る自我 (Ich) として存在するというのである。言い換えれば、「今—ここ」から決して脱することが出来ず、また「今—ここ」という自らの在り方に全く盲目的である動物と違って人間は、自分自身の中心（「今—ここ」としての自己）を損なうことなしに脱して、再帰的に同じ中心を省みる（同じ中心に関係する）ことが出来るというのである (cf. GS IV, pp. 362-364)。こうした意味でプレスナーは、人間の固有性の根幹となる脱中心的位置形式を端的に、「自分自身に対して距離を置くことの出来る能力」(GS VIII, p. 359) と表現している。

プレスナーにとって位置形式が生物の根本構造を意味していることは先に見たが、これは植物、動物、人間それぞれに固有な諸能力・諸性質は、それぞれの位置形式の特徴から（のみ）説明され得るということを含意している。つまりプレスナーにあっては、人間固有の諸特徴は、「脱中心的」位置形式の帰結として説明されることになる。脱中心的であるが故に——殊にチンパンジーのような近縁の動物と比較して——人間のみに見出される特徴として挙げられているものには、例えば以下のようなものがある。精神 (cf. GS III pp. 34-35 et al.), 言語 (cf. GS VIII, p. 277), 知性 (cf. GS VIII, pp. 55-57), 模倣能力 (cf. GS VII, p. 49), 友好・敵対関係 (cf. GS VII, p. 349), 嫉妬, 愛と憎しみ (cf. GS VII, p. 349; GS VIII, p. 372), 笑い, 泣き, 微笑み (cf. GS VII, pp. 201-387 et al.), 情熱 (cf. GS VIII, pp. 371-375 et al.), 鏡像認知（鏡に映った自分の像を自分自身の像と認識する）能力 (cf. GS VIII, p. 172 et al.)。

プレスナーの挙げるこうした人間固有の諸特徴に存する問題点は後に述べるとして、プレスナーの人間観を理解するために先に指摘しておかなければなら

ないのは、彼にあっては「脱中心的」が同時に「脱本能的」を意味しているということである。プレスナーは——ゲーレンと同様——哲学的人間学の創始者であるシェーラーに倣って、人間を世界開放的な存在、つまり生物的本能・欲求から解放された存在として特徴付けた (cf. GS VIII, pp. 180-189, p. 359; ゲーレン 2008, pp. 30-31 et al.). また、——やはりゲーレンに似て——人間という種は本能が欠けて (或いは極度に弱体化して) おり生物的に無能力である代わりに、それを補う高度な知的能力を持っているというヘルダー流の考えを採用した (cf. GS IV, pp. 384-391; GS VIII, p. 183, pp. 332-333; ゲーレン 2008, pp. 75-76 et al.).

プレスナーはこうして、人間の行動は動物的本能・欲求の影響から解放されていると主張する。しかも、上に挙げたような人間固有の諸特徴ばかりでなく、全ての人間行動がそうだとさえ主張する。人間の行動は——人間 (= 脱中心的存在) 固有のものであろうが、動物 (= 非脱中心的存在) にも存在するものであろうが——全て、脱中心的位置形式に基づくが故に脱本能的なものとなっているというのである。

プレスナーは例えば運動能力全般に関して、動物の運動能力は遺伝的 (本能的) に確定されたものである一方、人間の運動能力は、後天的 (つまり遺伝・本能とは無関係) に獲得されるものであるとしている (cf. GS VIII, p. 166). また性的衝動に関しても、人間の性的衝動は生物的本能の束縛から解放されており、本能とは別の要因 (社会組織や流行) がその源泉である (から人間のみに性的過剰といったものが存在する) と論じている (cf. GS VIII, p. 374). 更に一例を挙げれば、攻撃性に関しても、人間の攻撃性は人間特有な「人格 (自我)」に基づいており、その結果、本能に根差した動物の攻撃性とは「何の関係もない」 (GS VIII, p. 300) と断言している。プレスナーはまたこうも書いている。

「生命存在に関わる層は、人間においては …… 言語能力や抽象能力といった次元と絡み合っており、その結果、普通の人間的行動においてすでに、純粹に生命 (維持) に関わる諸機能——睡眠、栄養補給、消化、性交、位

置定位、防衛・防御反応といったもの——は、近縁の動物と比べてさえ異なったものとして様式化されている」(GS VIII, p. 184)

つまり、人間の生活・行動は、原則的に一挙手一投足に至るまで、動物（生物）的本能・衝動から解放されている、より正確に言い換えれば、他のあらゆる動物が拘束されているような動物（生物）的本能・衝動は、人間にあっては質的に全く異なる人間的＝非動物的なものへと変容・昇華されているというのである。プレスナーのこうした考えを、彼自身の言葉を用いて総括するならばこうである。脱中心的＝脱本能的性質によって人間は、「〔動物（生物）的な束縛という〕牢獄を破壊し、もはや動物的痕跡のある（環境）世界には住んでいない」(GS VIII, p. 277)。言い換えれば、人間とは「動物性を後ろにした存在」(GS VIII, p. 189)であり、こうした意味で、人間の本性とは「自然によって齎された非一自然」(GS VIII, p. 314)として特徴付けられるべきものである。

以上がプレスナーの動物－人間理解の要旨である。以下ではこうした理解のどこに問題が存するのか、それを進化論の観点から明らかにしたいが、その為にはまず、プレスナーの進化論理解を、彼のダーウィン批判を中心にしておく必要がある。

2. プレスナーの進理解とダーウィン批判

プレスナーは進化の問題を重要な問題とは考えておらず、生物（生命現象）はそれなしでも根本的な形で理解可能だと考えていた。であればこそ彼は、生物理解の絶対的基盤たるべき自身の位置形式の理論と進化の問題とは無関係であると明言できたのである (cf. GS IV, p. 431; GS VIII, p. 323)。しかしこれは彼が進化の問題に全く無関心であったことを意味するものではない。プレスナーは自然選択説を中心としたダーウィン進化論を繰り返し激しく論難していたのである。

ダーウィンの進化論（自然選択説）に徹底して異を唱えるなど、今日では信

じ難いものに思われるかもしれないが、当時としてはそれほど奇異なことではない。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ダーウィン進化論に基づいた生物理解は陰りを見せ、生氣論と呼ばれる別の形の生物理解が優勢となっていた (cf. Bowler 1992, p. IX)。この理論によれば、生物（生命）の中には理性や自然科学では捉えることの出来ない力が潜んでおり、その非物質的で内的な力が生物の活動や形態・性質の源泉をなしているというのである。こうした考えに立って生氣論者たちは、ダーウィン進化論は生物の活動や形態・性質を自然選択という外的作用によって説明しようとするものであり、生命現象の根本を捉え損なった謬説であると非難した。

このような生氣論者たちの主張は、プレスナーが哲学的人間学上の主著『有機的諸段階』を構想・執筆していた当時のドイツ哲学界にも大きな影響力を有していた。生氣論の議論にどれだけ深く関わるか、また、ダーウィン進化論をどう理解（或いは誤解）するかといった点になると一様とは言えないが、少なからぬ哲学者がダーウィン進化論を批判的に論じている。例えば哲学的人間学の中心人物である他の二人——シェーラーとゲーレン——にしてもそうであるし、カッシーラーやシュペンゲラーといった思想源泉を別にする哲学者にもダーウィン批判を見ることが出来る (cf. シェーラー 2012, pp. 19-20, p. 45; ゲーレン 2008, p. 8, p. 116; Cassirer 2002, pp. 185-203; Spengler 1931, pp. 27-28)。

こうした当時のドイツ思想界の状況に加えて、プレスナーが重要な生氣論者であるハンス・ドリーシュに師事していたことを考えれば、彼がダーウィンの自然選択説を繰り返し批判したことは驚くには当たらない。確かにプレスナーは、生物の非空間的・非物質的根源要素としての「エンテレヒー」(Entelechie) というドリーシュの概念からは距離を置いた (cf. GS IV, p. 141, p. 157)⁶。しかし、プレスナーが本質的に生氣論者であることには疑いの余地がない。彼は自身の哲学的人間学が、二人の生氣論者——ドリーシュとヤーコプ・フォン・ユクスキュル——の生物理論から受けた刺激を基に成ったものであることを明言している (cf. GS IV, p. 9)。加えて、生物理論に関してその二人と並んでプレスナーが高く評価しているのは、これもまた生氣論者のベルクソンであり、進化に関

してはバルクソン流の理解——生物に内在する非物質的衝動力であるエラン・ヴィタールが進化を推し進めるといふ考え——を有望なものと考えていた (cf. GS IV, pp. 40-49 et al.).

今挙げたような生氣論者たちの陣営に立ってプレスナーは、ダーウィンの進化論（自然選択説）を厳しく批判するのであるが、その批判の要点は「(生物の環境への) 適応」の問題に関わっている。プレスナーはそもそも——生氣論の公理に従って——、様々な生物がそれぞれの環境に「適応」しているという事実は、経験的・自然科学的には説明出来ないものだと考えていた。それぞれの生物がそれぞれの環境に適応しているのは、(例えば自然選択のような) 外的 (= 経験的・物質的) 作用の結果ではなく、生物自らがその内的な力によって環境と生物の間に「予定調和」(GS III, p. 112) を作り出している為であるというのである。それでつまり、生物における(環境への) 適応という問題は、経験的・自然科学的な方法ではなく、「生氣カテゴリーの分析」(GS IV, p. 109)、言い換えれば、位置形式の理論によってのみ理解され得るというのである (cf. GS III, pp. 111-112; GS IV, pp. 273-275).

このような考えを持つプレスナーが、位置形式の理論に基づかない経験的・自然科学的なダーウィン流の適応理論、つまり自然選択説を却下することは自明の理であると言って良い。しかし実際の所、プレスナーが自然選択説を激しく論難する主な理由は、その説が経験的・自然科学的であるという点に存するのではない。プレスナーによればむしろ、自然選択説が経験的事実に基づかず、経験的事実を根本的なところで捉え損なっていることこそが問題だと言うのである。プレスナーによる自然選択説批判の要点は次の一節に良く示されている。

[ダーウィンの考えによれば、] 自由競争は全ての生物を——出来得る限り高度な有用性〔を旨指す〕という原則に従って、出来得る限り最高の適応を求めるといふ——争いの中へと強制する。同じ生存課題を解決する為に、等価でありながらもその発端からして異なった方へと向けられた様々な方法が存在するという可能性、言い換えれば、門や属や種からなる彩りに富

んだ現象世界が我々にはっきりと示している様々の有用な形態、つまり、様々な〔生物の〕設計形態が（同時に）並んで存在するという可能性が、『より豊かな生物構成はより大きな有用性を保証する』という原理に基づく段階的上昇線〔が存在するという考え〕の為に無視されている。こうなれば、門、属、種といったものは、〔その差異を捨象され〕全く同一の課題に対する解決の試みと理解されねばならなくなる。生存環境の根本的な相違である水や空気や土といったものが、〔その差異を失って〕同じ一つの世界へと組み込まれてしまう。こうしてある生物が、栄養を与えるあらゆる場所をより良く利用することが出来るだけ、また、あらゆる環境の課す要求に対してより良く対処出来るだけ、その生物はより良く適応しており、進化の階梯の中でより高い位置を占めているとされる」（GS VIII, p. 145. Cf. also GS III pp. 110-112; GS VII, p. 96).

些か冗長で込み入った言い回しであるが、端的に言ってプレスナーは、ダーウィンの自然選択説は、（生命維持の為の）有用性＝適応というものを純粋に量的なもの（進化の過程を通じて量的に増大して行くもの）と捉え、生物の適応的な形態・性質及び自然環境に見られる多種多様な質的相違を完全に無視してしまったと言いたいのである。またそれゆえ、自然選択説は完全に誤った説であると言いたいのである。

プレスナーによるダーウィン進化論批判の要点は以上であるが、批判はそれだけに留まらない。プレスナーによれば、継続的な有用性の上昇という前提に立つダーウィンの進化論は、人間を生物界の頂点とするという大前提から出発し、人間（のみ）を尺度として作られたものとされる。しかもそこでの人間像は、イギリスにおける産業社会の在り方を基にして作られたものだというのである（cf. GS VIII, pp. 145-146）。「彼（ダーウィン）の」——とプレスナーは書いている——「自然選択の理論は、本質的には、マンチェスター主義（Manchestertum）の思想的枠組み——つまり、自由競争〔という考え〕と自由競争による価値上昇作用という信念——に従った生命現象の解釈である」（GS III, p. 136）。

ダーウィンの理論に親しんでいる者にとっては、これまで見てきたようなプレスナーによる批判が根拠のないものであることは言うまでもない。自然選択説は単なる「マンチェスター主義」に過ぎないと言う批判の方から先にすれば、それに対してはこう言える。プレスナーは自然選択説を恰も産業都市の喧騒の中で、実際の自然観察とは全く無関係に生み出された机上の空論のように看做しているが、実の所その説は、豊富な自然観察と自然に関する知識に基づいて創出された理論なのである。ダーウィンが五年もの間、世界の幾つもの海を大陸を島々を経巡っていたこと、また、そこでなされた観察と集められた標本とが自然選択説の着想に大きく寄与したことは良く知られている。

また、プレスナーによるダーウィン批判の要点に対しては、つまり、ダーウィン進化論は——有用性の量の継続的な増大・上昇という前提に基づいて——自然の質的多様性を無視しているというプレスナーの主張に対してはこう言える。生物学、地質学を含めた博物学に一生の大半を捧げたダーウィンが、水・空気・土などといった環境の質的な違いや、生物形態・適応の在り方の多様性を無視したなどという主張には全く何の根拠もない⁷。またダーウィンは、進化における有用性の量の継続的な増大を主張してもいない。彼は、進化史の紆余曲折の結果として、生物がしばしば——現在の環境にあっては——無駄な(有用でない)器官・構造を有していることを明言している(ダーウィン 2009a, p. 309, p. 336)。それに、ダーウィンが『種の起源』に描いた、——プレスナーも知っていたらしい(cf. GS VIII, p. 253)——(後に系統樹と呼ばれることになる)樹木型の進化図は、有用性=適応度の「増大」して行く様を表しているのではなく、形質(適応形態)が多様に「分岐」して多様な生物形態および種が誕生して行く様を表しているのである(cf. ダーウィン 2009a, pp. 207-223)。

プレスナーによる不当なダーウィン批判は上記だけに留まらないが⁸、本稿の目的にとってはこれ以上深入りする必要はない。ここでは、プレスナーが(根拠のあるとは決して言えない形で)ダーウィン進化論を根本的に誤った説であると激しく非難していたという事実と、その非難の主要点が確認出来ればそれで十分であり、以下ではそれを基に、プレスナーの哲学的人間学における根本

問題，つまりその人間および動物理解に存する本質的な問題点を明らかにして行きたい。

3. プレスナーの人間—動物理解における根本問題

プレスナーによる（不当な根拠に基づいた）辛辣なダーウィン批判という事実の確認が重要な意味を持ち得るのは、冒頭で触れたように、主要なプレスナー研究者の幾人かが、——プレスナーの進化観及びダーウィン批判を真剣に検討することなく——プレスナーの哲学（人間観）とダーウィン進化論（に基づく人間観）は根本的な点において相矛盾するものではないと主張している為である。それどころか彼らが、プレスナーの哲学はダーウィン進化論を有意義な形で取り込めるものであるとさえ論じている為である。彼らによれば、ダーウィン進化論に基づく生物学的・自然主義的人間像と非生物学的・文化的人間像は、どちらも等しく重要な人間像であり、プレスナー哲学はその両方の人間像を十全な形で扱うことを可能にする理論だというのである（cf. Fischer 2014; Krüger 2014）。ある研究者にとっては、彼の知る限りではプレスナーの理論がそれを可能にする唯一の理論であるとさえ言明している（cf. Krüger 2014, p. 58）。

非生物学的・文化的人間像に関する議論はここでは措くとして、問題は、本当に——これらの研究者が主張するように——プレスナーの哲学がダーウィン進化論を矛盾のない形で包含し得るものであろうかということ、より具体的に言い換えれば、プレスナーの人間観（および動物観）とダーウィン進化論に基づく人間観（および動物観）とは、重要な点において相容れるものなのであろうかということである。

これまでに見たように、プレスナー自身は、（人間を含めた）生物を理解する上で進化は重要な問題ではないとして、進化とは無関係な生物論・人間論を展開していた。また、進化の問題を論じるにあたっては、ベルクソンの生氣論的・反ダーウィン主義的進化論を有望視し、ダーウィン進化論はとなると、それを徹底的に非難していたのである。であれば、プレスナーの哲学・人間観が

進化論の考え、それもよりによってダーウィン進化論の考えを重要な形で取り入れることの出来るものであるという幾人かのプレスナー研究者の主張にはかなり疑わしいものがある。そうした主張が可能なのは、彼らがプレスナー自身の進化観・ダーウィン批判に注意を向けていない為ではないだろうか。少なくとも、プレスナー自身が彼らのそうした主張に反対するであろうことは殆ど疑いの余地がない。一体誰が、根本的に誤った（ものと激しく非難している）理論を自らの理論の中に重要な形で包含し得るなどと考えるであろうか？

もちろん、プレスナー自身が予期していなかった形（或いは点）で彼の哲学・人間観とダーウィン進化論に基づいた人間観が調和するという可能性は否定出来ない。しかしプレスナー自身の人間—動物理解を鑑みるに、やはりそうした調和は期待出来そうには思われない。

プレスナーとダーウィンの人間観（および動物観）を比較考量するに当たって重要なのは、ダーウィン進化論は生物の質的多様性を無視した、（有用性のみに関する）純粋に量的な理論であるというプレスナーの理解（批判）である。こうした理解（批判）が誤っていることは既に見たが、プレスナー自身の生物理論とダーウィンのそれとを比較する場合には——その場合のみには——そうした理解（批判）も一定の意味を持っている。つまり、ダーウィンの理論が純粋に量的であるという見方は、二つの理論の対比を鮮明にするという目的だけに限定するならば重要な意義を有している。

プレスナーがダーウィン進化論を純粋に量的で一元論的で、それゆえ根本的に誤った理論であると非難するということは、彼が自身の理論を質的で多元論的な理論であると解していたということを含意している。こうした両者の対照こそ、もしくは、こうした対照の意義こそ、プレスナーの人間観とダーウィンの人間観が相矛盾するものではないと主張するプレスナー研究者たちが見逃しているもののように思われる。言い換えれば、彼らは、（プレスナー自身も認識していた）ダーウィンの人間観における核心的な一事を見過ごしているように思われる。つまり、——ダーウィンが『人間の由来（進化）と性淘汰』の中で繰り返し強調しているように——（ダーウィン）進化論の観点からの人間

理解にあつては、人間と動物の間の（進化に由来する）連続性・共通性の認識が極めて重要な意義を持つという一事である（cf. ダーウィン 1999, pp. 39-40 et al.）。これは無論、ダーウィンが人間と他の動物の差異を無視したということの意味するものではない。差異は存在する。しかし、それもまた進化の連続性の中で生み出されてきた差異なのである。ダーウィンにとって、人間はあくまで、近縁の動物との共通祖先から連続的な過程を経て誕生した動物の一種なのである。

一方プレスナーの位置形式の理論は、こうしたダーウィンの進化論に真っ向から対立している。その理論は連続性・共通性をではなく、断絶性、それも架橋不可能な絶対的断絶性を大前提とするのである。つまり先にも見たように、プレスナーは、ダーウィンにとって極めて重要な前提である人間と動物との間の連続性・共通性を、——知性的側面、感情的側面、本能的・生理的側面等々——全領域に渡って否定しているのである⁹。人間の知性と動物の知的能力はまったく別種のものであり、感情とは本質的には人間のみ存するものであり（cf. GS VII, p. 349）、人間の攻撃性、性行動、睡眠、運動能力、栄養補給等々と言ったものも動物のそれらとは全く異質なものであり、そもそも人間には動物的本能など（殆ど全く）存在しない、などといったプレスナーの主張は、決してダーウィンの考えと相容れるものではない。つまり、——幾人かのプレスナー研究者の言に反して——プレスナーの哲学はダーウィン進化論と決定的な点において相対立している。それも偶然そうなのではなく、互いの断乎たる態度決定の結果としてそうなのである。

プレスナーのこうした人間観が抱える問題は後に回すとして、まずはその人間観が直結する彼の動物観に存する問題を先に指摘しておきたいが、その問題はチンパンジーの能力に関する彼の主張に良く表れている。

例えばヴォルフガング・ケーラーはその画期的な実験において、チンパンジーにも棒や梯子、箱と言った道具を使用する知的能力のあることを示したが（cf. ケーラー 1972）、プレスナーはそうした能力と人間の——彼によれば脱中心的な——知性の間の一切の共通性を否定した。チンパンジーが見せたそのような

知的能力は、人間の知性とは無関係な、森で生きて行く為に備わった単なる本能に違いないと言うのである (cf. GS IV, pp. 347-348; GS VIII, p. 56). また、チンパンジーにおける鏡像認知能力——先に触れたように、この能力はプレスナーによれば脱中心性を基盤としている——にしても事態はやはり同様である。人間の元で育てられたチンパンジーが、鏡を見ながら緩くなった自分の歯をペンチで引き抜いたという報告に対してプレスナーはこう論じる。チンパンジーは、鏡に映っているのが自分だと (脱中心的に) 理解していたわけではない。誰かがそうしているのを見たことがあって、それと同じことをやってみただけのことである。しかも、そう同じことをやったのも、決して模倣能力によるのではなく——何故なら模倣能力もまた脱中心性を必要とするのであるから——、単に本能的な共感作用によるのである (cf. GS VII, p. 397; GS VIII, pp. 175-176 et al.).

一見脱中心的に見える行動が人間以外の動物に存在するにしても、それは実の所単なる動物的本能に過ぎない。これといった議論もなしのプレスナーのそうした断定は、多くの耳に極めて説得力の低いものと響くのではないだろうか。仮にそうは思わないという人がいるにせよ、プレスナーの位置形式の理論がこの点で一つの大きな問題を抱えていることに変わりはない。それはつまり、その理論が、その理論への反証となりうる経験的・科学的事実に対して完全に閉ざされているという問題である。

例えばプレスナーが脱中心的＝人間固有の能力であるとする鏡像認知能力は、様々な実験や観察の結果、今日では幾種かの類人猿において (ある程度) 認められているが (cf. ズデンドルフ 2005, pp. 77-89), プレスナーの理論は、彼の理論に抗するそうした新しい知見に対して全く開かれていない。言い換えればそれは、そうした知見を真面目に顧慮することが全く出来ないのである。

ここで強調すべきは、問題なのは、ある具体的な能力 (例えば鏡像認知能力) が人間以外の種にも存在することを——時代の制約の為もあって——プレスナーが見誤っていたことではないということである。そうではなく問題は、彼の理論にあっては、人間という種に特有の能力や性質は、生物全般に関する経

驗的事實の積み重ねから帰納的に求められるべきものではなく、非科学的・抽象的に定義された脱中心性という概念から演繹されるべきものとされているということである。プレスナーが脱中心性という抽象概念に基づいて——これといった研究も観察も経ることなしに——人間固有＝脱中心的であると看做した能力は即座に、他の動物には萌芽としてさえ決して存在しない（するはずがない）と断定されてしまう。しかもそうした断定は、どのような新しい経験的事実にも揺るがされることがない。つまり言ってみればそれは反証不可能なのである。このような経験的事実の真摯な検討を経ることもなければ、新しい経験的事実に開かれてもいない断定は、ダーウィン進化論の観点からばかりか、科学的判断というより一般的な見地からも問題とされてしかるべきであろう。

こうした問題はもちろん、プレスナーの動物理解にのみではなく人間理解にも関わっている。ダーウィンにとっても人間は確かに生物界の最高峰に位置する高貴な動物であったが、しかしあくまで動物の枠を出なかった。人間とは、その様々な「素晴らしい力にもかかわらず、依然として消すことのできない下等な起源の印を残している」（ダーウィン 2000, p. 462）存在より他ではなかった。しかるにプレスナーは、先に見たように、人間を本質的に非自然的・脱本能的であり、「動物性を後ろにした存在」或いは「動物的痕跡」のない世界に生きる存在と看做した。その結果、彼の人間観からは、生物（動物）的・生得（本能）的要素の意義が（殆ど）全く排除されてしまった。人間にあっては、生物的・生得的な欲求や必要、性質や傾向性などといったものは意味を持たないもの、でなくとも好き放題に改変出来るものと前提されているのである。

プレスナーは、カッシーラーやディルタイの哲学は、人間の体が問題となる所で止まってしまうと批判している（cf. GS VIII, p. 243）。こうした批判が的を射ているにしても、プレスナー自身の哲学も同様の批判から免れるものではない。というのも、彼の哲学は確かに体を扱いはするが、人間の行動・暮らしにおいて体の有する生物的・生理的意味や限界を蔑ろにしているからである。体は、笑いや泣きと言った——彼によれば——極めて特殊な存在様態を除いて、（生物的・生理的なものから独立した存在としての）心・精神に從属す

るものとされているのである。しかも特殊な例外とされる笑いや泣きにおいても、体の役割は生物的・生理的・生得的なものとされているのである（cf. GS VII, p. 234）。つまり、体の生物的・生理的意味が問題となる手前で、プレスナーの哲学は止まってしまう。それは人体における生物的・生理的なものの意味を問おうとはしない。何と言っても、その哲学にあつては、人間とは——全生物界において人間のみは——、（人間以外の全ての動物種のあらゆる行動を拘束・規制する）生物的・生理的欲求や必要から殆ど完全に解放された存在であると前提されているのである。

ダーウィン進化論の見地からすれば、人間の体ばかりか心も、他の動物のそれと同様に——多く自然選択を通じた——進化の過程によって形作られたものであり、その結果、人間もやはり他の動物と同様——身体面においても精神面においても——生物的・生理的・生得的なものから逃れられるものではない。人間も動物の一種であり、就中近縁の種とは——様々な相違点と並んで——様々な共通点、それも人間の暮らし・行動を説明するにあたって決して無視することの出来ない、重要な諸々の共通点（共通の形態・性質）を有している。つまりダーウィン進化論の見地に立てば、人間というものを十全な形で理解する為には、人間と他の動物との間に存在する——連続的な進化の過程を通じて形成された——様々な共通点を認めなければならないということになる。同じ見地からすればまた、そうした諸々の共通点を——観察や実験を通じて——吟味し認識することで初めて、「人間と他の動物を分ける決定的な差異は何か」という哲学的人間学の主要な問いにも最善な形で答えることが可能となるといえる。（その場合、両者の差異は単に量的なものであり、哲学的人間学が想定するような質的＝決定的差異は存在しないという答えが導かれなとも限らないであろう。）

これまで見てきたように、もしダーウィン進化論の正しさを認めるのであれば、人間と動物（生物）の間の根本的断絶を前提とするプレスナーの哲学的人間学は、動物理解においても人間理解においても大きな難点を有していると言わざるを得ない。生物学がほとんど意味を持たなかった当時のドイツ哲学界に

あってプレスナーが——シェーラーの発想に倣い、ゲーレンと並んで——「人間（という生物種）とは何か」という問いを中心問題として据え、人間存在を生物界全体との関連の中で解明しようとしたことは評価されてしかるべきであろう。また、若きプレスナーが反ダーウィン主義的時代を生きたことも顧慮すべきであろう。しかしながら、生氣論に代わってダーウィン進化論が確固たる地歩を築いた後も、プレスナーが——彼の理論に都合の悪い生物学の発展を無視或いは曲解して（cf. 谷口 1985, pp. 291-294; GS IV, pp. 426-442）——生涯反ダーウィン主義的・生氣論的理論に固執し続けたことはやはり問題と言うべきであろう。

もちろん、プレスナーの哲学的人間学に見られるあらゆる主張がダーウィン進化論に基づいた人間—動物理解と何の接点も持ち得ないという訳ではない。しかし彼の人間学は、人間と動物の間の（進化的）連続性／（絶対的）断絶性という根本的な問題において、ダーウィン進化論の考えと真っ向から対立している。しかも、ここ数十年の間に積み上げられた自然科学の成果を見る限り、この対立点においてプレスナーの人間学は圧倒的に分が悪いように見受けられる¹⁰。

註

1 トゥーゲントハットは、「哲学的人間学」という言葉を、人間の本質を問うことを主眼とする哲学の一分野の意味で用いているが、彼の「哲学的人間学」理解はドイツの哲学的人間学の発想に強い影響を受けている。その証拠にトゥーゲントハットは、——ドイツの哲学的人間学と同様——哲学的人間学における「人間とは何か」という根本的な問いとは、具体的には、「人間と他の動物を分ける決定的な特徴・差異とは何か」という問いであると理解している（cf. Tugendhat 2010, p. 17）。

2 トゥーゲントハットも、プレスナーを含む哲学的人間学派が進化の問題を考慮しなかったことを一つの欠点として言及してはいるが（cf. Tugendhat 2010, p. 22）、それが哲学的人間学の主要な欠点であるとは考えてはおらず、進化の問題を追求してもい

ない。

3 1990年代以降のプレスナー研究の興隆は、「プレスナー・ルネッサンス」とさえ呼ばれている (cf. Allert 2014, p. 72)。

4 身体 (Körper) と肉体 (Leib) の区別は——両概念の明確な定義が与えられておらず、使用にも正確が期されていないにも関わらず——プレスナー哲学における重要な区別であるが、本稿の目的にとっては不要な為ここでは立ち入らない。本稿では身体と肉体とを同時に表現するプレスナーの用語 Leibkörper を「体」という言葉で表し、それをを用いることとする。

5 以下、ドイツ語の文献から引用する際の翻訳は全て本論筆者による。

6 『有機的諸段階』の発表から四十年ほど後 (1966年)、プレスナーはその第二版に生氣論の時代は過ぎ去ったと書いているが (cf. GS IV, p. 426)、これは、ドリーシュのエンテレヒーという概念が価値を失ってしまったということの意味しているに過ぎない。プレスナーは四十年前の主張の何を撤回あるいは修正している訳でもないのである。

7 ダーウィンは『種の起源』の様々な箇所でも水中・陸上・空中といった環境の違いを真剣に考慮しているし (例えば, cf. ダーウィン 2009b, 11章・12章)、生物種が様々な形態を取り、様々な仕方で「きわめて多様な目的」(ダーウィン 2009b, p. 324) に適応していることも様々な箇所でも前提としている (例えば, cf. ダーウィン 2009a, p. 118)。

8 プレスナーは例えば、不当にも、ダーウィンとラマルクの説を全く同じ理論として取り扱っている (cf. GS IV, pp. 269-275)。また、生きた化石と呼ばれるような生物の存在を——ダーウィンによる一貫性のある議論 (cf. ダーウィン 2009a, p. 194) を無視して——自然選択説への反証として挙げてもある (cf. GS VIII, p. 144)。

9 プレスナーは、人間と (近縁の) 動物の間には一切の共通性が存在しないとまで主張している訳ではない。しかし、人間と動物の共通性というものは、進化とは無関係な位置形式 (或いは形態) による類似として説明されなければならないという (cf. GS VII, p. 98, p. 249)。加えて、人間と動物の間の類似的な性質については、話の序でにごく手短かに触れられているだけであり、そうした性質はプレスナーの人間理解に

おいて何ら積極的な意味を持っていない。

10 本研究は JSPS 科研費 (17J06545) の助成を受けたものである。

文献

Allert, Tilman, “Zu Plessners 120. Geburtstag in Wiesbaden – »drei Geburtstagsgäste«,” in: T. Allert / J. Fischer (ed.), *Plessner in Wiesbaden*, Wiesbaden: Springer VS, 2014, pp. 71-76.

Bowler, Peter J., *The Eclipse of Darwinism. Anti-Darwinian Evolution Theories in the Decades Around 1900*, Baltimore/London: Johns Hopkins University Press, 1992.

Cassirer, Ernst, *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit. Vierter Band*, Hamburg: Meiner, 2002.

Fischer, Joachim, “Philosophical Anthropology. A Third Way between Darwinism and Foucaultism,” in: J. de Mul (ed.), *Plessner’s Philosophical Anthropology. Perspectives and Prospects*, Amsterdam: Amsterdam University Press, 2014, pp. 41-56.

Krüger, Hans-Peter, “The Nascence of Modern Man. Two Approaches to the Problem – Biological Evolutionary Theory and Philosophical Anthropology,” in: J. de Mul (ed.) 2014, *op. cit.*, pp. 57-78.

Plessner, Helmuth, *Gesammelte Schriften*, Frankfurt/M: Suhrkamp, 2003 (GS と表し、巻数をローマ数字で示す)。

Spengler, Oswald, *Der Mensch und die Technik. Beitrag zu einer Philosophie des Lebens*, München: Beck, 1931.

Tugendhat, Ernst, *Anthropologie statt Metaphysik*, München: C.H.Beck, 2010.

ケーラー, ウォルフガング, 『類人猿の知恵試験』, 宮孝一訳, 岩波書店, 1972年。

ゲーレン, アーノルト, 『人間—その性質と世界の中の位置』, 池井望訳, 世界思想社, 2008年。

シェーラー, マックス, 『宇宙における人間の地位』, 亀井裕・山本達訳, 白水社, 2012年。

ズデンドルフ, トーマス, 『現実を生きるサル 空想を語るヒト』, 寺町朋子訳, 白揚社, 2005年.

ダーウィン, チャールズ, 『種の起源』, 渡辺政隆訳, 光文社, 2009年(上巻 2009a, 下巻 2009b).

ダーウィン, チャールズ, 『人間の進化と性淘汰』, 長谷川眞理子訳, 文一総合出版, 1999年(第I巻), 2000年(第II巻).

谷口茂, 「解説—プレスナーの人間学の基礎概念」, in: H・プレスナー, 『人間の条件を求めて』, 谷口茂訳, 思索社, 1985年, 279-300頁.

